

# 『唐話纂要』と閩語の接点

——船・劇・海上シルクロード

商 鐘 嵐

The Connection between *Tōwasanyō* and the Min dialect

—— Ships, Plays and the Maritime Silk Road

Zhonglan SHANG

This article examines the Min dialect in *Tōwasanyō* and examines the influence of the Min dialect on Japan in the lexical, literary and economic aspects in Japan and the Min region during the Edo period. Ships connected *Tōwasanyō* and the Min dialect, and the Maritime Silk Road connected Europe and Asia, making them one and the same. By reviewing the Maritime Silk Road, we can find a new way of looking at modern globalism from an alternative perspective.

Keywords: *Tōwasanyō*, Min dialect, Maritime Silk Road, ships

キーワード：『唐話纂要』、閩語、海上シルクロード、船

## 一、はじめに

地球表面の70%は海洋からなっている。海洋は人類にとって神秘的だが、不可欠な存在である。コロンブスの大陸発見から鄭和の大航海まで、どちらも人類の壮挙であり、人類が海洋と闘いながら探索してきた証である。船舶で世界を探検することはどの時代においても意義があり、それがあからこそ現在の人々の世界認識が成立しているのである。巨大な海洋で隔てている東洋と西洋が「大航海時代」によって連結され、両者は縮まり、一つの世界になった。グローバル化した現在の世界貿易も海洋航路の開発により幕が開いた。

秦、漢時代に端を発する海上シルクロードは中国の沿岸を起点とした。主な都市は広州と泉州で、漳州、莆田、福州、江門、汕頭、潮州、蘇州、寧波、南京、揚州などを經由し、太平洋とインド洋を渡った。お茶、シルクをはじめとする中国の物産を日本、韓国、アフリカ、ヨーロッパなどの国へ運び、中国と世界を繋いだ。宋元時代に繁盛期に入ったのだが、明清時代には次第に衰退していった。海上シルクロードは中国の海洋貿易状況を反映するだけでなく、各時期における世界の繋がり、世界的な貿易シ

ステムの下で包摂的文化融合が盛んに行われていたことを表現した。

2018年に、泉州は「古泉州（刺桐）史跡」で世界遺産を申請したが、認められなかった。2021年、泉州は失敗から立ち直り、22箇所の代表的な古跡をもって宋元時代の生活、経済、社会を包括する一体化システム「宋元時代中国の世界海洋貿易中心」として世界遺産の申請に成功し、「世界遺産名録」に収録された。

泉州、漳州、廈門、福州などの閩の歴史は海と船を抜きにしては語れない。唐の時代から、閩地方は中国の中心地である中原からの「入閩」で次第に開発され始めた。各時代に沿岸地域は次のように形容された。唐宋時代には福州は「海舶千艘浪，潮田万頃秋」と言われ、宋元時代には泉州は「世界東方第一港」と言われ、明の時代に漳州（月港）は「海上一大都会」と言われ、清の時代に廈門は「大小帆檣之集湊、遠近貿易之部会也」<sup>1)</sup>と言われた。いずれも当時閩の重要な貿易港であることを示す表現である。

一方、隣国の日本は江戸時代には「鎖国」を行い、長崎を唯一の貿易港とし、オランダと清の船しか入港できないと規定した。1684年、清政府の「展海令」より、中日の貿易往来が促され、特に泉州、廈門港、漳州などから日本へ出航する中国の貿易船は数少なくなかった。「福建省船籍の船舶は43.2%に上り、清代において日本との貿易は極めて活発であった」<sup>2)</sup>こととされる。貿易にはなくてはならない「通事」はこのような状況を背景に生まれたものである。当時の日本の「唐通事」は世襲で継ぐ職業であったため、民間で中国語（唐話）を勉強するブームとなり、『唐話纂要』をはじめとする唐話テキストが続出した。

『唐話纂要』にある語彙は南京語が中心だと思われているが、当時の貿易状況と上に述べた福建省船籍の船舶が50%近くであることを考えると、中には閩語も混じっている可能性も十分に考えられる。山本が言うように、「18世紀末寛政期の長崎唐通事と唐商たちは、相互の共通語として、語法語彙はできるだけ官話を主用したものの、その発音はアモイ方言音、福州方言音、それに蘇州方言音のなまりが混用されるブローケンな発音が通用していた」<sup>3)</sup>のである。筆者が『唐話纂要』にある語彙を閩語辞典と対照したところ、散在する閩語語彙をいくつか発見した。つまり、発音だけでなく、『唐話纂要』の語彙にも閩語語彙が混じっているのである。そこで、本稿では『唐話纂要』と閩語の接点をめぐってさらに検討を進めたい。

## 二、閩語の地域的分布

「閩」という文字は、門構に虫と書き、本来獣が出る荒野の地の意味であるが、現在福建省の略称となっている。『説文解字』には「閩，東南越，蛇种，从虫，門声」とあり、つまり、閩は本来蛇をトーテムとする民族という。

1) 周凱『廈門誌』（清、道光19年）、巻2。

2) 松浦章「中国帆船による東アジア海域交流」（周縁の文化交渉学シリーズ5『船の文化からみた東アジア諸国の位相—近世期の琉球を中心とした地域間比較を通じて—』2012年12月）、13頁。

3) 山本紀綱『長崎唐人屋敷』（謙光社、1983年）、298頁。

閩語は主に現在の福建省内に分布するが、浙江省南部、広東、海南、台湾、東南アジアなどでも使用されている。『中国語言地図集』（2012年版）<sup>4)</sup>には、閩語は閩南区、莆仙区、閩東区、閩北区、閩中区、邵将区、彌文区、雷州区8つの使用地区に分けられている。閩南区が閩語の中心地域であり、中には泉漳小区、大田小区、潮汕小区、浙東南小区、贛東北小区5つの小さな地域、85の市と県が含まれている。福建省以内の厦門、泉州、漳州、龍岩、漳平、寧徳、永安、三明、福清と所属の県<sup>5)</sup>、さらに台湾の台北、高雄、桃園、台中、台南など合計56地域がすべて泉漳小片の範囲である。福州は閩の範囲内であるが、閩語の「閩東区」に分けられている。福建省内は山地が多く、交通が不便な時代では、同じ閩区とはいうものの、互いの交流が少ないため、隣の県でも違う音調が生じることがあり、「十里不同音」と言われることがある。本稿では、閩南区における閩語を中心に検討を行う。

### 三、『唐話纂要』と閩語の接点

#### 1、語彙面における接点

中国における船舶で海洋を開拓する歴史は新石器時代からすでに始まったと言われている<sup>6)</sup>が、文献として『易経・系辞』には「利涉大川、乗木有功也」と表現されており、木が渡航の有利な道具であることが古代の人々にすでに認識された。中国語には、船を表す語彙として舟、帆、蓬、筏、舸、舫、艘、艦、船など数多い。英語にも boat、ship、vessel、canoe、raft、junk などの語彙があるが、中でも junk の語源は閩語を起源としているとも言われている。『The random house Dictionary Of The English Language』には「Junk [1545-1555], 〈pg.junco,a kind of sailing vessel 〈malay jong, said to be 〈dial. Chin. (Xia Men) chun, cf. Guang Dong dial syuhn Chin. chuan〉という解釈があり、つまり英語の junk はポルトガル語の junco から、junco はマレーシア語の jong から、さらに jong は厦門の方言 chun から伝わったと言われている<sup>7)</sup>。ポルトガルの歴史言語学者 Rodolfo Sebastião Dalgado も「junco」は中国語の「chuen」から、さらにジャワ語の「jung」、「ajung」、「jong」からポルトガル語に入ったと考え、1300年に最初の記録がすでに残されていると言われている<sup>8)</sup>。

福建産の木造船は「福船」と呼ばれ、十二支で船の部品を命名するのは「福船」の特徴である。

『(康熙) 台海使槎録 8 卷 卷二』には、この記録がある。

「海船按十二支命名：船頭邊板，曰鼠橋；後兩邊欄，曰牛欄；舵繩，曰虎尾；繁碇繩木，曰兔耳；船底大木，曰龍骨；兩邊另釘灣杉木，曰水蛇；篷繫繩板，曰馬臉；船頭橫覆板，插兩角，曰羊角；鑲龍骨木，曰猴植；抱桅篷繩，曰雞冠；抱桅繩木，曰狗牙；拄桅脚杉木段，曰桅豬」。

『唐話纂要』第5巻の「船具」にも「桅豬」、「龍骨」、「水蛇」、「牛欄」、「馬面」、「虎尾」、「鷄捍」、「羊頭」など上記の史料と一致する船舶部品の名称が見られる。しかし、残りの四つ「鼠橋、兔耳、猴植、

4) 『中国語言地図集（第2版）：漢語方言卷』（中国社会科学院語言研究所、2012年）、111頁。

5) 中国の行政区分は省級、地級（市）、県級、郷級と4層のピラミッド構造から成る。

6) 房仲甫、李二和『中国水運史』（清華出版社、2003年）、3頁。

7) 華昶「源于漢語閩方言的英語詞」（『福建外語』1995年03期）、9頁。

8) 金国平、吳志良「鄭和下西洋葡萄牙史料之分析」（『史学理論研究』2003年03期）、56頁。

狗牙」の名前は『唐話纂要』に出てこない。

ほかに、十二支に属していないが、『唐話纂要』には「陸（鹿？）耳（おそらく「鹿」の誤写）」という動物に相関する船舶部品名があった。『(康熙) 台海使槎録 8 卷 卷二』以外にも『(咸豊) 続修噶瑪蘭序志 台湾府噶瑪蘭序志卷五』、『(乾隆) 重修台湾府志 25 卷 卷十一』には「大鹿耳 夾大桅木 頭鹿耳 夾頭桅木」という記録があり、「鹿耳」は清の時代に福建船、台湾船の部位名称だったと確認できる。

干支と関係なく、「繚母」、「踏索」、「下金」、「車耳」、「尾樓」、「無底昇」という部品名も『(康熙) 台海使槎録』に記録がある。現代中国語辞書では載っていない「繚母」は中国古籍データベースで調べると、21条の記録、六冊の史料<sup>9)</sup>が出てきた。そのうち重複の記録を除けば、6条が残った。その6条のうち2条を下に紹介する。

『(咸豊) 続修噶瑪蘭序志 8 卷』：「黄麻 為繩繚之用、其名有大律繚篷踏繚小踏繚大繚母小繚母大千墜小千金墜」。

『中山伝信録 6 卷』：「正副繚手二人、主大帆及尾送布帆繚母棕繚木索等物」。

「繚」という文字は本来「巻きつく」意味で、後は「ロープ」と転用された。「母」は中国語では①母親②女性への尊称③老婆④雌性⑤本源⑥他物を生ませる<sup>10)</sup> 意味があるが、どれも「繚母」には嵌められない。閩語では「母」が名詞と付き、例えば、「拳頭母」、「山母」、「虱母」等、「大きい、高い」など程度を表すことができるが、この使い方を『漢語方言大詞典』で調べたところ、他の方言には見つからないようである。閩語の意味で解釈するなら、「繚母」は大きく、太いロープの意味になり、『唐話纂要』の「ミナワ」とほぼ一致と言えるのではないだろうか。

「繚母」が閩語のもう一つの証明としては、明清時代の閩南方言と官話の対照表を書籍にした『正音郷談』<sup>11)</sup> にも、「繚母」は閩南語とされ、正音として「官繚脚」<sup>12)</sup> と記されている。

上記の語例は台湾系の地方志にだけ見られるもので、「繚母」は船舶術語であり、福建、台湾以外の史書には見られないことから「繚母」が閩南語であることが確認できるだろう。

次に、「篷厝」という閩語の特徴語と考えられる言葉について考察する。

「篷厝」という言葉は現代中国語にはすでに見られないが、『唐話纂要』にある「篷厝」は「船中の小屋」という意味である。「厝」単独の文字は李如龍の研究では閩語の「一級特徴語」と認定されており、つまり閩語区では通用するが、他の方言地区及び標準語にはほとんど見られない言葉である<sup>13)</sup>。また、16世紀のカステイーリャ語と閩語の対照辞典には「厝」の文字が載っている<sup>14)</sup>。しかも「不在厝」（留

9) 6冊の史料はそれぞれ『台海使槎録』、『(咸豊) 続修噶瑪蘭序志 8 卷』、『(乾隆) 重修台湾府志』、『広東海防彙覽 42 卷』、『中山伝信録 6 卷』、『(同治) 淡水序志』。

10) 何九盈、王寧、董琨『辞源（第三版）』（商務印書館、2017年）、2247頁。

11) 明清時代に編纂された閩南語と正音（官話）の対照書籍である。別名『什音全書』。

12) 呉守禮『什音全書中閩南語資料研究』（台湾从宜工作室、2006年）、124頁。

13) 李如龍『漢語方言特徴詞研究』（厦門大学出版社、2002年）、280頁。

14) 周振鶴『中欧語言接触的先声：閩南語与卡斯蒂里亞語初接触』（復旦大学出版社、2018年）、152頁。カステイーリャはスペインの歴史的な地域名である。カステイーリャ語と閩南語とは16、17世紀のフィリピンのルソン島で接触が

守という意味)の言葉が併記されている<sup>15)</sup>。

「厝」は古代中国語では一般的にも使われたが、閩方言と違い、異なる意味で使用されている。『説文解字』では「厝、厲石也」、即ち研ぎ石のことである。『広韻』には「厝、置也」と「措（置く）」と同じ漢字と考えている。『古辞辨』<sup>16)</sup>には、「厝」を三つの意味とその使用例が紹介されている。一つは「置く」の意味で、『列子・湯問』に、「帝感其誠、命誇娥氏二子負二山、一厝朔東、一厝雍南」。即ち、二つの山をそれぞれ朔東、雍南に置くという意味である。もう一つは「納棺」の意で、『三國志蜀二主妃子傳』に、「園陵將成、安厝有期」という語句があり、ここの「安厝」は「お墓を建てる」意味である。三番目の意味は「錯」と同じ、交わりという意味である。つまり、古代中国語では「厝」は「部屋」という意味を元々持っていなかったことがわかる。

「中国方志庫（方志コーパス）」を調べたところでは、「厝」は閩では明の時代から、村の名前に使われていた。『備倭凶記2巻』には、「白沙、料羅、金門、烏沙、曾厝安、南風湾、是為浯嶼要害」という記録があり、ここから「厝」は古くから地名として使われていることが分かった。福建省内で「厝」で呼ばれる地名は300箇所近くある<sup>17)</sup>。厦門では現在でも実際に使われており、「曾厝安」という有名な観光地がある。

また、部屋の意味として使われていた例として『（明嘉靖）惠州府志 惠州府志卷之十五』には、「潮州謂粥爲糜、謂屋爲厝、餘多潮音龍川稍同河源」という記録と『（弘治）大明興化府志54巻 重刊興化府志卷之九』に「後方芹坑後埔梁厝 莆人呼所居處爲厝盖」記録があり、明の時代から閩地方は家屋のことを「厝」と呼ぶようになったことがわかった。清の時代になると、閩地方では「厝」という言い方はすでに定着していた。そして、現代閩南語では「厝辺」（近所）、「厝里」（屋内）、「起厝」（部屋を建てる）、「厝租」（家賃）など「厝」で使った語彙は多数ある。

なお、「ツヲ、」は『唐話纂要』では「uo」か「u」の発音を表記していることは、以下の言葉の発音からわかる。例えば、「上坐（ジャンツヲ、）」、「作禮（ツヲリイ）」などでは「uo」が「ツヲ、」「ツヲ」で表記されている。それに対し、「不足（プツヲ）」、「當初（タンツヲ、）」、「初相見（ツヲ、スヤンケン）」などの言葉では「u」が「ツヲ、」「ツヲ」で表記されている。したがって、「篷厝（ボンツヲ、）」の発音を再現すれば、「bonchu」か「boncuo」になる。これは福州語の発音「 $\text{phun}^{53}\text{tshuo}^{212}$ 」と閩南語の「 $\text{phoŋ}^2\text{tshu}^5$ 」の発音にかなり近い。ゆえに、『唐話纂要』にある「篷厝（ボンツヲ、）」の発音も閩語の発音を取り入れたと考えられる。

以上から、『唐話纂要』に出てくる船舶と関係ある語彙は福建船に関するものが多いことがわかった。これらの語彙は、当時福建船が長崎との間を盛んに往来していたことを示すだけでない。古代漢語辞典にも見つからない語彙が実は閩南語語彙であることが明らかになった。これは閩南語語彙の辞書編纂、史料の充実にも大きな役を果たすであろう。

---

行われた。

15) 周振鶴『中欧語言接觸の先声：閩南語与卡斯蒂里亞語初接觸』（復旦大学出版社、2018年）、185頁。

16) 王鳳陽『古辞辨（増訂版）』（吉林文史出版社、1993年）、661頁。

17) 李如龍『漢語方言特徵詞研究』（厦門大学出版社、2002年）、283頁。



## 2、文学面における接点

『唐話纂要』には現代中国語と語順が違う語彙がある。例えば、「鬧熱（ゼナ〇ウ）」などが記録されているが、これを岡田袈裟男氏は『江戸異言語接触』<sup>18)</sup>の中で「誤刻」（誤植）だと判断している。それは「鬧熱」の発音ならば「ナ〇ウゼ」のはずであるが、「ゼナ〇ウ」と書かれているのである。では、「鬧熱」と「熱鬧」と、どちらのほうを冠山は取り入れたかったのか、冠山は語順を間違えたのか、あるいは発音を間違えたのか、それを以下で「鬧熱」は文学や演劇で使用された例を挙げて検証したい。

「鬧熱」は『現代漢語辞典（第7版）』に出てきたが、方言と解釈され、「熱鬧」で説明されている<sup>19)</sup>。近代中国語、また長江より南地方の方言（上海、安徽、福建、江蘇、江西など）には現に存在している語彙である。現代閩語にも「鬧熱」は頻繁に使われている言葉で、「鬧鬧熱熱」、「斗鬧熱」、「看鬧熱」などの派生語があり、「賑やか」な場面を表すときに用いられる。

唐・白居易の『雪中晏起偶詠所懷』には「紅塵鬧熱白雲冷、好於冷熱中間安置身」という詩句があり、「鬧熱」を「冷」と対照、世界の二重様相を正反対の言葉で現した。清の時代の『（光緒）長樂縣志16卷之十二』にも「婦女皆於此時省親、市場惟此時最鬧熱」と市場の活気があることを描写している。

その一方、「熱鬧」も唐・白居易の『夏日與閑禪師林下避暑』に「熱鬧漸知隨念盡、清涼常願與人同」とあり、ほかの史書にも多用されている。つまり、「熱鬧」と「鬧熱」は古代において併用されていたのである。

さて、中国基本古籍庫と基本方志庫で検索したところ、二者が各時代における使用頻度は以下の通りである（表1）。

表1：「熱鬧」と「鬧熱」の使用頻度

	南北朝	隋	唐	五代	宋	遼	金	元	明	清	民国
鬧熱	0条	0条	1条	0条	11条	0条	0条	4条	79条	335条	20条
熱鬧	0条	0条	11条	0条	21条	0条	2条	23条	303条	1180条	299条

上表の数字から、どの時代においても、「熱鬧」の使用頻度が明らかに圧倒的だということが分かった。次に、この二つの語彙を下記の5部の明清小説と2部の劇を対象として使用状況を比較したら、面白い発見があった（表2）。『金瓶梅』、『紅樓夢』などの小説と北方の雑劇を中心とする劇本集『元曲選』には、表1に表した規律と一致しており、「熱鬧」は圧倒的に多い。

ところで長江よりも南で盛んであった『六十種曲』という演劇に着目してみたい。すると、上表の規律と逆転した結果が出た。『六十種曲』とは『琵琶記』、『荆釵記』、『幽閨記』、『精忠記』、『鳴鳳記』、『玉簪記』、『牡丹亭記』など60種類の劇から成り、南方劇を中心とする中国演劇史上では最古で、しかも最大規模の演劇集である。この現象から、「鬧熱」は明の時代にすでに南方の方言として定着しているということが考えられる。

18) 岡田袈裟男『江戸異言語接触（第2版）』（笠間書院、2009年）551頁。

19) 『現代漢語辞典（第7版）』（商務印書館、2016年）、942頁。

表2：「熱鬧」と「鬧熱」が明清小説と劇における使用頻度

	金瓶梅	水滸伝	紅樓夢	西遊記	醒世恒言	六十種曲	元曲選
鬧熱	4条	1条	0条	1条	2条	7条	0条
熱鬧	33条	15条	79条	4条	30条	5条	10条

文学性から見れば、「鬧熱」と「熱鬧」は形式上にはただ語順が逆になっているだけだが、強調する中心内容は語順の変化によって変わる。「鬧」は『古代漢語詞典』<sup>20)</sup>には、形容詞として「喧しい」、「濃艶、旺盛」二つの意味がある。宋祁の『玉楼春』には、「緑楊煙外曉寒輕、紅杏枝頭春意鬧」という名句が掲載されており、「鬧」一文字で紅杏の繁栄とそれをもたらした濃厚な春の息吹を表しているといえる。また、音声以外に、紅杏が賑やかに咲き、満開する姿を臨場感溢れる描写で伝え、画面感に満ちた文字と言える。即ち、「鬧熱」は音声と様相を伝えることによって最終的に独特の情熱的な雰囲気を作り出す。音声、様相を重んじているといえるだろう。それに対して、「熱鬧」はまず雰囲気としての熱さが強調されて伝わり、その後に音声と様相が伝わる。つまり、前者は片面から全体、後者は全体から片面の違いがあると言えるだろう。

「鬧熱性」は中国明清時代の南方劇の本質である。南劇の劇本『白兔記』には「不挿科、不打諢、不為之傳奇」とあるが、南劇では生、旦、浄、末、醜などの役を通じ、民俗儀式、滑稽なしぐさ、賑やかな音楽、戦争や諍いなどの場面で「鬧熱性」を演出すると南方の伝記劇の特徴が記されている。『白兔記』に結婚式に関する場面や、『牡丹亭』に出てくる「勸農」儀式に関する描写や、『荔鏡記』の「元宵節」に関する場面もすべて南劇の「鬧熱性」を表している。

葉憲祖の『鸞鏡記』に、

〔浄〕 奴奴蒙公主娘娘召請賞花，怎么不多設些鼓樂，吹的吹，打的打，做他几个雜劇院本，鬧熱一鬧熱，倒是這般靜悄悄的？

〔旦笑介〕 花前張樂陳劇、謂之俗因。

〔浄〕 管什么俗与不俗，只是鬧熱些的好。〕

という対話があり、南劇の本質が喧しい音声とシーンで「鬧熱性」を作り出している。「鬧熱性」を演出するには、「俗」、つまり民俗風習、庶民向けの賑やかさが必要である<sup>21)</sup>。「俗」と「雜」で劇曲を演出する「鬧熱性」は明清時代庶民たちの美意識にかなったものであり、当時の庶民文学の反映である。

日本と英国で発見された閩南、広東地区の伝統的な劇——『荔鏡記』<sup>22)</sup>も「鬧熱性」が満ちた劇である。例えば、

〔今冥灯光月団圓，琴弦笙簫，鬧滿街市〕（第六出 五娘賞灯）、

〔元宵好景巧安排，鑼鼓（羅古）鬧咳咳〕（第六出 五娘賞灯）、

20) 張双棣、殷国光『古代漢語詞典』（商務印書館、2014年）、769頁。

21) 黄天驥、徐燕琳「鬧熱的『牡丹亭』」（『文学遺産』、2004年第2期）、93頁。

22) 『荔鏡記』に使われている方言について、中国学界では論争がある。論争の焦点は主に潮州劇と閩南劇のどちらに帰属する問題である。

「啞娘、今冥是元宵大鬧」(第六出 五娘賞灯)、

「香車宝馬鬧滿処」(第八出 士女同游)。

上記の内容に、元宵節に「花灯」を観る風習やお祭りのことで賑やかな雰囲気を作り出す。そして、琵琶、二弦、三弦、洞簫、拍板、南嗚(嗚唎)、鈴、銅鑼などの楽器で賑やかな雰囲気を作り出し、「絲竹相和」の形で「鬧熱」の特徴を表す。これは閩劇である。

閩語での「鬧熱」は名詞としても賑やかな行事のことを言う。お祭りなどの法事は閩地方では「醮」と言われている。「作醮」においては、嗚唎、琵琶、二弦、三弦、鉦鼓、鑼鈸<sup>23)</sup>は演奏時に重要な楽器である。南音、梨園劇、高甲劇などの曲調と道士たちの法事を組み合わせ、僧侶たちの詠唱、劇の上演、シンバルの演奏など一連のことで、やかましい音声を作り出し、「鬧熱」で賑やかな雰囲気を演出する。閩地方の人にとって、これはまさに「鬧熱」のことである。有名な「媽祖祭り」、「王醮(送王船)」なども「鬧熱性」に溢れた行事である。

南方方言に親しんでいた冠山は、南方文学に見られる「鬧熱」のニュアンスと南劇に表れた濃厚な文学性を知っていたと推定することは可能であろう。そうすれば、「鬧熱」を取って取り入れたとも考えられる。その際、冠山に語順と発音に関して混乱が生じたために、「ナ○ウゼ」とすべきところを「ゼナ○ウ」と表記してしまった、とも考えられる。

### 3、経済面における接点

ここでは、当時の経済活動の中で使用されていた語彙について考察したい。『唐話纂要』第5巻に「疋頭」という類別があり、錦、緞子、紗などに関する布類の語彙が収録されている。今回はこの中の「天鷲絨(ビロード)」に焦点をあてる。また、そこから当時の中日貿易状況の一隅が窺えるだろう。

日本でもビロードを「天鷲絨」と漢字表記することがあるが、本来ビロードはヨーロッパの製品である。13世紀にイタリアが「天鷲絨」の生産を始め、14世紀にベニスにヨーロッパ最大の産地になり、15世紀前半、フィレンツェから「天鷲絨」の輸出がはじめられた<sup>24)</sup>。1460年から1560年の間、「天鷲絨」の生産はフランスでも大きな産業になった<sup>25)</sup>。日本にもたらされたのは天文(1532~55)年間であるが、慶安(1648~52)年間になってオランダ製品を模倣して織り始めたという<sup>26)</sup>。

では、中国で「天鷲絨」が生産され始めたのはいつごろであったのか。中国基本古籍庫と方志庫によると、「天鷲絨」という語彙が使われだしたのは、明の時代が最初である。また、明萬曆三十四年(1606年)商濬刻本の『兩朝平攘録5巻 卷四』には、以下の記録がある。

「日本国王豊臣秀吉相贈什物。先解赴兵部施行。及抵京。即以諸物作閩白貢獻進朝廷。群臣無不哂詆。

23) これらの楽器は「二弦」を除いてすべて『唐話纂要』に収録されている。

24) 沈定平「明清之際幾種歐洲仿製品の輸出—兼論東南沿海外向型経済の初歩形成」(『中国経済史研究』、1988年03期)、50頁。

25) 伍純武『法国社会経済史』(河南人民出版社、2017年)、33、34頁。

26) <https://kotobank.jp/word/%E3%83%93%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89-121980> (『小学館日本大百科全書(ニッポニカ)』)



謂猩猩毯天鷲絨出自南番。皆中国人販売與日本者。何云方物。又以正成所贈惟敬泥金圍屏。亦充其數。明是欺罔。」

これは「豊臣秀吉（1537—1598年）が猩猩毯、天鷲絨を外国（南番）からの貴重品として明朝廷に朝貢したが、実は中国から日本への輸出品だった」という意味である。

ここで疑問が生ずる。この天鷲絨は「外国（南番）からの貴重品」だったのか、それとも中国で既に生産が始まっており「日本への輸出品」だったのか。それを言葉の面から探してみたい。

「ビロード」はポルトガル語の‘veludo’が音声転写されたものだと考えられているが、日本での記録は『徳川実紀』の「慶長一三年（1608）一二月一六日」の記事に「南蛮伴天連天鷲絨一卷」という最古の記録<sup>27)</sup>が残されている。

『本草綱目』巻47《食物》に、「時珍曰：鵠大于雁，羽毛白澤，其翔极高而善步，所謂鵠不浴而白，一挙千里，是也。亦有黄鵠、丹鵠，湖、海、江、漢之間皆有之，出遼東者尤甚，而畏海青鵠。其皮毛可為服飾，謂之天鷲絨」という記録があり、即ち李時珍の年代（成書年代1552-1578）にすでに「天鷲絨」の言い方が存在している<sup>28)</sup>。秀吉の没後すぐの1604年（明）に編纂されたカステリーリヤ語と閩語の辞書<sup>29)</sup>にも「絨」、「剪絨単」などの語彙が掲載されていることから、そのとき漳州に「漳絨」技術がすでにあったことがわかる。

『(萬曆)泉州府志 泉州府志卷三（1612年）』には「羅有二様、一為硬羅、一為軟羅、但不如蘇杭佳。亦有織天鷲絨者、不如漳州佳」、つまり、17世紀の初めごろ、福建の漳州はすでに優れた「天鷲絨」の織作で名をあげた、という記録がある。このことから同時期に編纂された上掲『両朝平攘録5巻 卷四』（1606年）が誇大な嘘（「中国から日本への輸出品」）を記しているとは言えないだろう。

そして、「天鷲絨」は日本では難読漢字として知られておりあまり馴染みを感じないらしい。しかし、我々中国人はこの文字を見ると、手触りが白鳥の毛のように柔らかい製品であるという感触を得て、その品質の高さを思い浮かべる。「天鷲」（白鳥の意）は中国語で普段使われている言葉である。おそらく「ビロード」という物と名称が既に日本にあったが、後年それに中国語の「天鷲絨」という漢字を当て、熟字訓として使われるようになったと考えられる。

『漢語外来語詞典』では「天鷲絨」を日本語からの借用語と断定している<sup>30)</sup>が、上のように考察すると、それはむしろ中国語から日本語へ転入、そして岡島冠山が唐話として日本に紹介したと考えられる。

なお、『唐話纂要』にある「天鷲絨 テンゴウジョン (ten gou jyon)」という発音に対し、現代閩南語の発音は「thi<sup>1</sup>go<sup>2</sup>liɔŋ<sup>2</sup> (厦泉)」、<sup>31)</sup>「thi<sup>1</sup>go<sup>2</sup>dziɔŋ<sup>2</sup> (漳)」である。とくに漳州の発音は『唐話纂要』の発音にほぼ同じである。「絨」は調べるところでは、呉語では「dzɔŋ<sup>22</sup>」、南京方言では「zɔŋ<sup>13</sup>」<sup>31)</sup>、上海方言では「ɲɔŋ<sup>13-22</sup>」<sup>32)</sup>という発音である。呉語と南京方言では『唐話纂要』のカタカナ表記にある介音が

27) 『日本国語大辞典』<https://kotobank.jp/word/%E5%A4%A9%E9%B5%9E%E7%B5%A8-2078905>.

28) 『本草綱目』巻47巻。『清文淵閣四庫全書本（写本）』より。

29) 周振鶴『中欧語言接觸の先声：閩南語与卡斯蒂里亞語初接触』（復旦大学出版社、2018年）、166頁。

30) 高明凱等『漢語外来語詞典』（上海辞書出版社、1984年）、343頁。

31) 許宝華『漢語方言大詞典』（中華書局、1999年）、4536頁。

32) 雄汝傑『上海地区方言調査研究』（復旦大学出版社、2013年）、125頁。

無くなり、上海方言では声母が『唐話纂要』と違った。ここから、『唐話纂要』にある「天鷲絨」は漳州方言のほうに近い、漳州方言の発音で記録されている可能性が高いと考えられる。

『増補華夷通商考（1708）』巻2にも、「天鷲絨」が福建省の特産と記されている。福建の「四大商港」の一つである月港（漳州）が明の時代に世界を繋ぐ著名な貿易港であり、「漳絨」も月港から国内外へ輸出する重要な商品の一つになり、国内では「下吳越如流水」、国外とは「乗風掛帆、往来絡驛于海上」という繁盛な場面となった。

清の時代に、清政府は当時福建を拠点とした明の遺臣である鄭成功の勢力と閩の沿岸地域で40年近くの戦争で対峙し、「月港」も戦争に巻き込まれた。清政府は福建沿岸で「遷界令」を実施、広東省から山東省までの海岸線以内の住民を内陸に強制的に移住させた。「月港」も「棄土」とされ、漳市の「漳絨」職人たちも内陸へ移させられ、「漳絨」の生産技術が浙江、江蘇一帯へ持ち込まれた。民国18年（1929年）、漳州が漳絨技術を復興させるために、漳絨技術を知っている70歳以上の職人も雇ったが、職人の逝去により、漳絨技術が一時的に漳州で途絶えた。しかし、1958年に職人を南京、蘇州へ派遣、南京の漳絨工場で研修させたことで、「漳州紡織厂」の「針織製品部門」は漳絨技術を再び手に入れ、工場から独立して1961年に「糸紗厂」を成立させた。この後、「漳州糸紗厂」で生産した漳絨製品は国内外の展覧会で脚光を浴び、好評を得た。しかし、コスト、原料などの原因で、大量生産するまでには至らなかった<sup>33)</sup>。漳絨が漳州で姿を消したのは残念極まりないことであるが、1960年に当時の中国国家副首相である董必武が漳州を訪れた時に残した「君子所履」という題詞が漳絨に織られた。それは現在漳絨が漳州に残ったわずかな痕跡の一つである。

一方、漳絨技術が江蘇一帯へ伝えられた後、改良され、南京特有の「彫花天鷲絨」となった。『清続文獻通考400巻 卷三百八十五実業考八』には、「八絨有漳絨、建絨、金銀絲絨等。漳絨本産漳州、今南京蘇州織造為最盛」の記録があり、南京蘇州の漳絨技術が漳州を上回ったことを記録している。2006年12月に丹陽漳絨織作技術は南京省に「無形文化財」と認定され、工場長戴春明、戴玲は「漳絨織作技術の継承人」と認定された<sup>34)</sup>。漳州から南京へ、リレーのようにバトンが次から次へと渡っていった。これは中国国内における海上ルクロードの接点でもいえるのだろうか。漳絨は漳州で姿を消したが、南京で継承、改良され、無念に思うより、伝統技術が保存されることを幸いと思うべきであろう。

『唐話纂要』に収録されている「柳条」は現代中国語と日本語にある「柳の枝」の意味と違い、縞柄の布を指す。CCL コーパス<sup>35)</sup>で「柳条（布）」を検索語彙で現代中国語における使用状況を調べたら、516条の中にわずか8冊の作品（合計11条）<sup>36)</sup>に布の意味として扱っていることがわかった。即ち、「柳条」は現代中国語では布としての意味はほぼ使用されていないということである。が、この言葉は『漢語方

33) 漳州市地方志編纂委員会編『漳州市志（第二冊）』（中国社会科学出版社、1999年）、298頁。

34) [http://www.dyrdw.gov.cn/dy\\_RD/008/20210207/008\\_df40c243-d75e-4a80-8593-26a45c516299.htm](http://www.dyrdw.gov.cn/dy_RD/008/20210207/008_df40c243-d75e-4a80-8593-26a45c516299.htm)。

35) 「CCL 語料庫」、北京大学中国語言研究中心、[http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl\\_corpus/](http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/)。

36) 「柳条」を載せる7冊の作品は『風云初記（孫犁）』、『連環套（張愛玲）』、『市場報（1994）』、『青春之歌』、『苦闘（歐陽山）』、『佳作』、『故郷天下黄花（劉震雲）』。「柳条布」を載せる作品は1冊。

言大詞典』<sup>37)</sup>に閩方言として収録され、日常用語として活躍している。

「柳条布」は綿布の一種であり、中国国内で普及したのは明代以後のことである<sup>38)</sup>。福建は宋から木棉の栽培が始まった。『西山雜誌・紗崗』には、

「陳厝，盖起自三国陳時之宗族也。从岭南至閩中，到处有木棉，又曰茄拌。陳氏已能于紡且織，机杼手拂之有梳棕，皆自為之，一方人咸績，積之紡也。陳有木棉絮田野，丰稔皆出而易之紗，晒之崗也。織布之雅，运之交州交人皆曰陳氏之布焉」<sup>39)</sup>という記録がある。つまり、福建泉州にある紗崗村では宋の時代から木棉の栽培が始まり、綿布の紡績も優良で周辺地域へ販売されたということである。

しかし、明清時代の海禁により、福建の紡績業は次第に衰微していった。木棉は松江府の人によって烏泥涇鎮にもたらされ、安徽商人によって全国各地へ販売されていった<sup>40)</sup>。そして、染料の発展により、布も色、技法、柄によって雪里青布、柳条、蘆席絲布など数多くの種類に増えた。まさに「名称甚衆、花様日新」である。

『八閩通志』には、

「絲《閩中記》：“此地蚕桑差薄，所戸者多類，民間所須織紗帛，皆資于吴航所至。” 綢土産之絲粗而類，僅可為綢絕耳。絹綾鍛紗羅往年俱于蘇杭售以充貢，近方有織者，然亦不逮遠矣。吉貝布長樂梅花諸処間有織者。苧布緝苧為之。圓紗者曰夏布，有雜絲織之者曰兼絲布，諸邑間有之，又有匾紗者曰縹布，出長樂県。麻布連江、福清、永福皆有之。侯官甘蔗洲出者佳。蕉布《海物异名記》云：“取蕉，灰理其皮，織以為布，旧嘗入貢。” 葛布緝葛皮為布。（上二布諸県間有之。）」<sup>41)</sup>とある。

これは明清時代に閩の絲、綢は品質不良のため、殆ど江蘇一帯から運輸されてきたものである。絹綾鍛紗羅などは往年蘇州、杭州へ販売して貢物とされ、近隣にも織るところがあるが、なかなか及ばない。棉布、夏布、麻布、蕉布は品質がいいという意味である。

さらに、『増補華夷通商考』<sup>42)</sup>の記録によると、永春白布、葛布、白絲、綾、紗、羅、閃鍛、柳条などは福建の特産であることを記載していた。

上記から明清時代に福建と江南デルタの地域貿易が見られるし、中国国内と隣国日本との貿易状況もみられる。明清時代に、福建の綿布産業の発達により、江南から絲、棉などの原材料を取り入れ、自分の特産である夏布、麻布、染料などを江南へ販売していった。その代わり、江南も福建の木棉栽培技術を学び、綿布の生産技術の面にも自分なりに発展し独立していった。棉布産業においては閩と江南との間に相互に補充し合う良好なウインウインの循環貿易関係となった。そして、独自の特産を海路の開発により東南アジア、ヨーロッパなど世界各地へ輸出し、世界範囲に及ぶグローバル貿易ネットが形成された。

37) 許宝華『漢語方言大詞典』（中華書局、1999年）、3836頁。

38) 松浦章「徽商汪寛也と上海綿布」（『関西大学博物館紀要』、2001年第7巻）、21頁。

39) 鄭学檬「宋代福建沿海对外貿易的發展对社会經濟結構变化的影響」（『中国社会經濟史研究』、1996年02期）、46頁。

40) 松浦章「徽商汪寛也と上海綿布」（『関西大学博物館紀要』、2001年第7巻）、21頁。

41) 『(弘志) 八閩通志』 卷25食貨。

42) 『増補華夷通商考』 卷2、11頁。

#### 四、終わりに

本稿では、『唐話纂要』にある閩語語彙を検討してきた。『唐話纂要』に収録されている語彙は一般的には南京官話が中心だと思われるが、当時長崎においては日本と貿易を行っていた福建船舶の活発、商人、船員、通事を主体とする人員の交流を考えると、閩語語彙の存在は確実であると考えられる。本稿は史料を調査することによって、『唐話纂要』にある閩語語彙の経緯を検討し、二者が語彙面、文学面、経済面における接点について検討を行った。

『唐話纂要』にある閩語語彙の存在は史料の調査で明らかになった。船舶用語の対照から当時閩語が海洋を媒介として渡海する船舶によって日本に伝わったことを証明した。閩の船舶が日本へ持ち入ったのは言葉だけでなく、閩の文学、文化も日本、さらに世界へと広がった。「鬧熱性」を備える中国南方劇も日本に認めてもらい、共感を得た。海洋の向こうで発見された閩劇台本の存在も当時の世界範囲に及ぶ交流が見られる。

語彙、文化、文学の交流は貿易の触媒作用から離れない。航路の開発により、世界範囲に及ぶ貿易が頻繁に起こり、近世のアジアではヨーロッパの「天鵝絨」服を着ることも珍しくないことであり、ヨーロッパでも南京綿布を着ることも稀なことではない。これこそ海上シルクロードの意義である。海上シルクロードで連結したのは中国国内の都市だけでなく、西洋にまで広がり、一つの世界となった。海上シルクロードを振り返ってみることで、現代のグローバリズムの在り方を別の視角から捉えることができるのだろう。

また、音韻に関しては『唐話纂要』の中に「汨（ルイ）」、「善（ゼン）」など杭州語と伝承関係がほぼないといえる漢字の発音も散在している<sup>43)</sup>。これらの発音は閩語とどんな関係があるのか、さらに検証が必要で、別論として研究を進めたい。

---

43) 李寧「試論『唐話纂要』的音系性質」(『方言』、2021年01期)、61頁。